日本語學研究 第48輯(2016. 6. 20. pp.21～32)　http://dx.doi.org/10.14817/jlak.2016.48.21

パラオ人の日本語に見られる談話の特徴
―ターン交替時の発話を中心に―

斎藤敬太*・磯野英治**

〈Abstract〉

Quantitative analysis in turn-taking in Palauan Japanese language conversations

The purpose of this study is to quantitatively analyze lower Japanese nonnative speakers' conversations at Palau. We analyzed the utterances by comparing Japanese native speakers and Japanese learners for similarities or differences.

As a result, he(TN) used "back-channel feedback" and "discourse-marker" as much as these speakers. Needless to say, he could communicate more smoothly in Japanese. In addition, this study found "Short turn-taking" by "back-channel feedback" and "discourse-marker". On the other hand, there were non-typical expressions of "back-channel feedback おお", function of " repetition " and so on.

As the significance of this study, we provided limited data about lower Japanese non-native speakers' conversations at Palau, and such empirical analyses of actual data will enable us to offer effective and realistic materials for instructing non-native speakers in the techniques of Japanese conversation construction.

Field : Sociolinguistics

Keywords : Quantitative and qualitative analysis, Turn-taking, Palauan Japanese speaker, Japanese native speakers, Japanese learners

1. はじめに

第二次世界大戦終戦まで日本の委任統治領であった旧南洋群島には、正確な統計などは把握されていないものの、日本時代に日本語を習得した残存日本語話者が今も存在している。そして、これらの諸地域を対象としたこれまでの残存日本語研究は、そのほとんどが日本語レベルの比較的高いインフォーマントを対象とした研究である。日本語レベルが高くない者には日本語でのインタビューが難しいと考えれば、そのような話者のデータを取るということ自体がほとんどなかったという状況も推察できる。しかしながら、旧南洋群島に属するパラオ共和国において、日本語レベルの高くない話者であるTNに対してインタビューを試みると、たしかに誤用がある、語彙数が少ないなどといったことが多々あったものの「会話そのもの」は比較的スムーズに成立した。日本語を普段使う環境にないはずのTNが、なぜその

*　首都大学東京大学院 博士後期課程,日本語教育学
** 名古屋商科大学 専任講師,日本語教育学

ように話すことができたのであろうか。

高齢化に伴い残存日本語話者が減少している現在の状況の中で、これまで対象とされてこなかった日本語レベルの高くない話者についてはデータ自体が少なく、今後はデータ収集が一層困難になることが想像に難くない。その点において、本研究は資料的な価値として貴重なものとなることが期待できる。また、これまでに旧南洋群島の研究は数多くなされてきたが、その多くは現地語の日本語借用語に関する研究であった(真田1996、ロング・斎藤・Tmodrang2015など)。その中で残存日本語話者のコミュニケーション(あるいはコミュニケーション・ストラテジー)に関するものとしては由井(1996)、ロング・新井(2012)、ロング・今村(2013)、斎藤(2014a,b)などが挙げられるが、まとまった傾向を示したり、母語話者との比較からその特徴を論じたりしたものは少ない。本研究では、(1)パラオ人残存日本語話者と日本語母語話者および日本語学習者とのデータを比較し、量的・質的なアプローチから体系的な分析を行うことで、これまで対象とされずに空白となっていた日本語能力の高くない話者の研究をカバーし明らかにして残存日本語研究の一翼を担い、(2)いかにして語彙や文法的知識の不足を補って「会話を進めているのか」について、母語話者および学習者との比較から定量的に検証した上で質的な分析を行うという手順を踏むことによって、パラオ人の日本語の談話的特徴を体系的に描き出す。以上が本研究の根本的な意義と目的であるが、分析を通じて会話を成立させたり自然に聞こえたりするなどのストラテジーの日本語教育への応用の可能性にも言及する。

2. 先行研究

前述のように旧南洋群島の話者を対象としたコミュニケーションに関する先行研究としては由井(1996)、ロング・新井(2012)、ロング・今村(2013)、斎藤(2014a,b)などがある。由井(1996)では、パラオと同じく旧南洋群島の一つであるミクロネシア連邦のヤップ州の日本語話者を対象に、訂正過程のストラテジーについて論じている。その指摘として、語量不足による訂正過程のストラテジーとしてフィラーや言い換え、説明的表現などが使用されるという言及があるが、質的な分析のみを行っているため、量的な面には特に触れていない。またロング・新井(2012)は、やはり旧南洋群島のマリアナ諸島の日本語話者の会話について、語彙を思い出せない時に「あれ」を挿入することで間に合わせるなど「文法能力が不完全な話者でも、コミュニケーション能力は高い」と述べているが[1)]、詳述はされていない。いずれにしてもこれらの研究では、事例の紹介に留まっており、母語話者や学習者との比較や量的分析は行われていないため、指摘としての重要性は支持できるものの、頻度や使用表現の傾向を把握することはできない。

一方、斎藤(2014a,b)では、畠(1988、1992)の「会話のストラテジー」を援用し[2)]、パラオの日本語話者が会話を円滑に進めるために語彙や文法知識の不足を補うコミュニケーション・ストラテジーとして

1) ロング・新井(2012) p.74,80

2) 畠(1988、1992)は「文法能力は必ずしもコミュニケーションの成功を保証しない」とし、「会話のストラテジー」は「実際の会話のうち実質的な意味はほとんど伝えずにひたすら会話が成立するために存在している部分」であり、しかしながら「コミュニケーション能力を構成する重要な部分」と位置付けている。

フィラーを多用していることを数量的に示し、また斎藤(2014a)では在日ブラジル人との比較を事例的に扱っているものの、会話の「展開」が円滑に行われているマーカーとしてのフィラー(を含む言語形式)の定義や、パラオ人独自の傾向についての分析に課題が残る。

3. 調査概要

本研究におけるインフォーマントとなった残存日本語話者は、80代のパラオ人男性TNである。2013年9月に日本語母語話者である調査者がTNにパラオの灯台跡地を案内してもらいながら、半構造化インタビューを実施し、約28分の会話データを収集した。話題としては、灯台跡地にあるものやそこから見えるものなどの説明が主になっている。

TNの日本語学習歴は、公学校[3)]での3年間であり、この公学校も日本人のほとんどいないガラルドという地域にあった。戦時中は日本軍用のヤシ油を製造するために動員され、日本人の多く住むコロールへ移り住んだ。しかしながら戦後は、日本語教育や日本語母語話者との交流が途絶えることとなり、また、彼自身はその後アメリカ統治による英語教育を受けることとなったため、TNの日本語は化石化したという経緯がある。

「1.はじめに」でも述べたように、残存日本語話者そのものが高齢化により減少している中で、日本語レベルの高くない話者については、データ自体が収集されてこなかった。そのため、本研究では1名のインフォーマントについて事例的に扱っていくことを予め断っておく。

4. 分析方法

本研究では、「会話における展開性」に大きく関係し、また会話の中でインタラクションの特徴が顕著に現れる「ターン交替時」[4)]について量的分析を行う。それにより、まとまりのある談話から、日本語レベルの高くないパラオ人話者の会話が円滑に展開する要因を母語話者、学習者との比較を通して明らかにする。

文字化方法は、ターン交替時の発話を分析する目的から、宇佐美(2007)の「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」を採用し、ターン交替の認定をはじめとして、文字化データの3次チェック(ピアチェック)まで行い、その信頼性を確保した。その上で、ターン交替時のTNの発話について、磯野(2009、2010a,b、2011a,b,c、2013)及び磯野・上仲(2014)の分類(表1)に倣っ

---

3) 1922年に、これまでの「島民学校」を改称する形で設置された。公学校は、本科3年、補習科2年である。公学校には現地島民の児童のみが通い、日本人児童は公学校とは別に設置された小学校(国民学校)に通った(斎藤2014a)。

4) 本研究におけるターン交替の認定については、上述したBTSJによる改行の原則に従い、「BTSJ上で改行が行われた時点を指し、かつ対話者の発言にもう一人の話者の発言が続く場合」をターンが行われた(※改行されていても同一人物の会話が続いている場合はターンと認定しない)と操作的に定義した。

た分析項目を用い、コーディングを行った。

また、分析に際しては、ターン交替時の発話を形式的に分類する際に、その形式的分類が客観的な指標として問題がないかという信頼性を確保するためのCohen's Kappa[5](Bakeman&Gottman 1986)を算出した。本研究では、κ=0.952という数値が得られ、κ>0.75でコーディングの信頼性が確認されている。

以上のような方法論に基づく手順で音声・文字化データの作成を行った上で、パラオ人日本語話者の会話について、まず磯野(2010a)の日本語母語話者の会話、磯野・上仲(2014)の日本語学習者の会話との比較を行い、ターン交替時にどのような形式で会話が始まり、それがまとまった談話として展開しているのかを検証する。

〈表1〉形式的分類(磯野2010a,pp.145-149を参照)

大分類	小分類
A.「ディスコースマーカー(DM)」	a-1.「接続」a-2.「つなぎ言葉」a-3.「フィラー」
B.「指示・言及」	b-1.「指示」b-2.「言及」
C.「あいづち」	c-1.「はい系」c-2.「そう系」 c-3.「感動詞系」c-4.「その他」
D.「返答」	*
E.「繰り返し」	*
F.「言い換え」	*
G.「疑問」	*
H.「先取り」	*
I.「直接発話」	*

5. 分析と考察

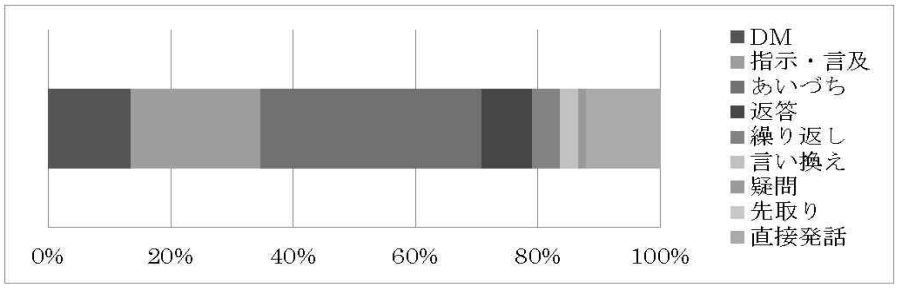
5.1. 定量的分析

ここでは、パラオ人日本語話者TNのターン交替時の特徴について、磯野(2010a)の日本語母語話者、磯野・上仲(2014)の日本語学習者のデータと定量的な分析から比較を行うため、表1で示した各形式の頻度と割合をそれぞれ列挙する。なお、この形式的分類は、それ以前の研究(西原1991、ザトラウスキー1993、堀口1997、大浜1998、初鹿野1998)を2010年の時点でまとめ、再検討を行ったものである(磯野2010a)。まずパラオ人日本語話者TNの会話のターン交替時における特徴について、以下の表2、グラフ1に示す。

5) Cohen's Kappaは第三者となる評定者を立て一致率を測定する手法で、分類に対して単純に何パーセント一致しているかという確率(単純一致率)から偶然に一致する確率(偶然一致率)を差し引く方法である。機械的分類の基準値がκ>0.75であればコーディングの定義、分類方法について問題がないと考えることができる。

〈表2〉 パラオ人日本語話者TNの会話のターン交替時における各出現頻度･出現率

	DM	指示･言及	あいづち	返答	繰り返し	言い換え	疑問	先取り	直接発話	合計
(回)	18	28	48	11	6	4	1	0	16	132
(%)	13.63	21.21	36.37	8.33	4.55	3.03	1.32	0.00	12.12	100.00

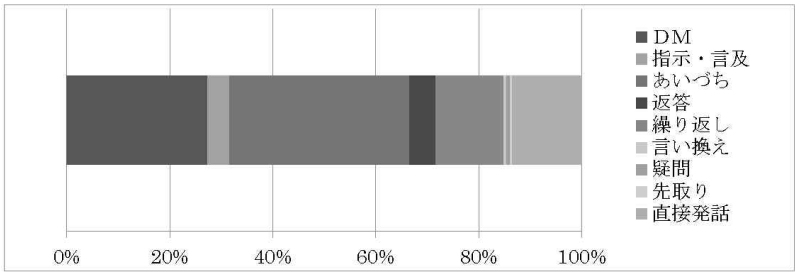


〈図1〉パラオ人TNの談話における構成要素(形式大分類)

次に、磯野(2010a)より日本語母語話者24人の各会話のターン交替時における特徴について、以下の表3およびグラフ2に示す。なお、日本語母語話者は初対面での会話、男性12名と女性12名の計24名、年齢は20代、その時点での言語環境は東京といった条件統制を行っている。また本会話は「インタビュアー1名×日本語母語話者24名」という形式を採用しつつも、複数の質問項目について設定された質問内容から大きく逸脱しない限り、自由な会話がなされているもので、後述の日本語学習者の会話も同様である。このような会話の位置づけについては磯野(2010a)を参照されたい。

〈表3〉日本語母語話者の各会話のターン交替時における各出現頻度･出現率の平均

		DM	指示･言及	あいづち	返答	繰り返し	言い換え	疑問	先取り	直接発話	合計
(回)	平均	49.92	3.92	30.42	4.54	11.63	0.54	0.67	0.29	13.13	91.13
	S.D	13.86	2.92	9.04	3.19	5.40	0.77	0.82	0.69	9.34	22.92
(%)	平均	27.36	4.30	34.90	5.12	13.15	0.63	0.66	0.39	13.51	100.00
	S.D	10.17	2.95	11.26	3.39	6.06	0.98	0.72	0.91	7.08	0.00

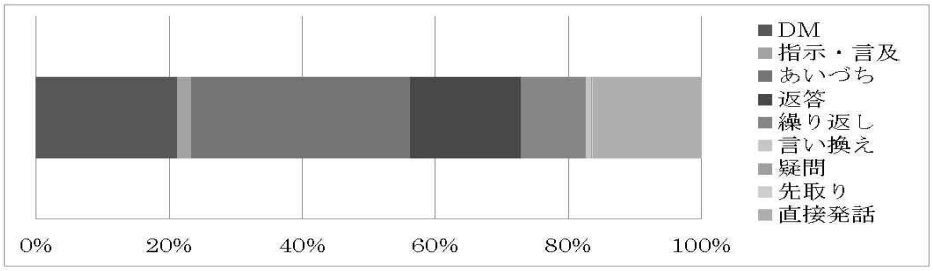


〈図2〉日本語母語話者24人の談話における構成要素(形式大分類)

最後に、磯野・上仲(2014)より日本語学習者の各会話のターン交替時における特徴について、以下の表4、グラフ3に示す。なお、日本語学習者は初対面での日本語会話、男性10名と女性10名の計20名、年齢はほとんどが20代(80%以上)、日本語レベルは中級以上といった条件統制を行っている。

〈表4〉 日本語学習者の各会話のターン交替時における各出現頻度・出現率の平均

		DM	指示・言及	あいづち	返答	繰り返し	言い換え	疑問	先取り	直接発話	合計
(回)	平均	13.50	1.35	20.90	10.55	6.20	0.50	0.10	0.10	10.30	63.50
	S.D	4.62	1.18	9.00	5.07	3.19	0.61	0.31	0.31	5.45	13.22
(%)	平均	21.86	2.09	32.26	16.83	9.90	0.82	0.14	0.16	15.95	100.00
	S.D	8.16	1.86	9.81	7.89	5.10	0.99	0.43	0.48	7.75	0.00



〈図3〉外国人日本語学習者20人の談話における構成要素(形式大分類)

グラフ1~3を比較してみると、「あいづち」およびDMの割合は、ともに全体の50%を超えていることがわかる。磯野(2009、2010a,b、2011a,b,c、2013)及び磯野・上仲(2014)では、日本語母語話者や上級日本語学習者が「命題的な自身の言いたいこと」のみを述べる(「直接発話」がこれにあたる)のではなく、様々な形式的項目を駆使して会話を円滑に展開させていることを指摘しているが、グラフよりTNにも同じことが言える。つまり、TNは語彙や文法的知識をこれらで補うことによって、会話をスムーズに展開させている、言い換えれば、会話をむやみに途切れさせないようにしているということである。この結果から、斎藤(2014a,b)の指摘をある意味で裏付けることができた[6]。

また、TNの「返答」は8.33%と日本語学習者の約半分であり、むしろ日本語母語話者に近いことがわかる。つまり、TNはYes/Noで応答し、会話を展開することが多くはないということである。さらに「繰り返し」が日本語母語話者や日本語学習者に比べて少ないことも特徴である。磯野・上仲(2014)では、日本語学習者の「繰り返し」の特徴的な機能として「相手の発話内に出現した意味不明の言葉を繰り返すというストラテジー」が存在する、つまり「説明要求」であるとしているが、TNは語彙知識に乏しいといえるにも拘わらず、全体で6回現れた「繰り返し」のうちそのようなストラテジーで用いていたものは一つもなかった[7]。これは、TNが意味交渉を逐一行おうとせず(必要とせず)、会話の円滑な展開を優先

6) ただし、本研究から分かるようにパラオ人日本語話者が会話を展開するに際しては「あいづち」が最も多く使用されており、まず初めに強調されるべきであろう。

7) その他、TNの独自の特徴としては「指示・言及」が日本語母語話者や日本語学習者のそれより圧倒的に多い割合で現れている。ただし、これについては灯台跡地の案内をしていた関係上、構造物や植物などの解説

した結果と考えられる。

5.2. 定性的分析

次にTNの会話について、定性的な分析を行う。まずTNの発話には、一発話文の短いものが目立つ。あいづち･DM･返答などの単独使用、あるいはそれらに短い発話を加えた程度のターン交替が多いということである。具体的な例を以下に示す。

形式的分類：C.あいづち　c-1.はい系

124	R1	いやー、ずっと、日本《にっぽん》の古い、あの(おー) 建物見たかったんですよ。		
125	TN	おお、そう。	C	c-1
126	R1	ん、初めて見れた。		
127	TN	うん。［約6秒沈黙］	C	c-1

上記の会話では、TNはR1の発話に対し125「おお、そう。」や127「うん。」のようにあいづちのみで一発話が非常に短く終了している。「はい、~(短い発話)。」のように短いターン交替を繰り返す事例は、初級的受け答えの名残であり、主に中級レベルまでの日本語学習者に多く見られることを磯野･上仲(2014)で指摘しているが、これは会話を途切れさせないためのストラテジーとして機能しており、TNの場合も短い発話でも受け答えることによって会話を継続させている。

また、日本語母語話者や日本語学習者にはあまり見られないあいづちもTNの会話から出現する。具体例を以下に示す。

形式的分類：C.あいづち　c-1.はい系

28	R1	違うか、これはただの壁か。		
29	TN	おお、そして、爆弾《ばぐだん》を降って、落としたがら、(うん)これが、そう。［約7秒沈黙］	C	c-1

上記の会話では、R1の発話に対しTNは29「おお」と反応している(この場面では何かを発見した際の「おお」などではなかった)。このあいづち「おお」の機能は文脈から考えると、応答(磯野2010b)で「話を聞いているという信号」であるが、そのような機能を伴うあいづちは日本語母語話者や日本語学習者にはほとんどみられない。そのような「おお」をTNは前述の125「おお、そう」など、「Cあいづち･c-1はい系」全34回のうち8回使用していた。

加えて、5.1.で述べた通り、「繰り返し」は相手に「説明要求」をするものは一つもなかったが、6回中5回で現れたものは次の会話のような機能である。

をしていたことに関係すると考えられる。

形式的分類：E.繰り返し

216	R1	こ、こうなって、(うん。)なあ、あらないな。でもこっち、うーんでもここ、コンクリートが。		
217	TN	そうconcrete。	C	c-2
218	R1	あるから。		
219	TN	**あるがら。**	E	

上記の会話では、R1が「あるから」と発言したことに対し、TNは「あるから」と一語文で繰り返しているが、これは日本語学習者がよく使う「説明要求」の「繰り返し」ではなかった。また、磯野・上仲(2014)で示された「確認」の用法とも当てはまらない可能性がある。TNの繰り返す「あるから」は、「あるから」ということばの意味が分からなかったのではなく、「あるから、それで？」といったようなR1の発言の続きを促す機能が考えられる。これは日本語母語話者も用いる。

A「昨日友達と会って」
B「会って」
A「それで一緒に夕飯を食べたんだ」

このように、日本語母語話者も使用するストラテジーで、自らの発話量を少なく抑えて相手へターンを譲ることでも会話を継続させていると考えられる。

さらに、あいづちやDM[8)]の表現形式の種類について注目してみたい。TNのものを表5、日本語母語話者のものを表6に示す。

表5　TNのDMの表現形式

出現頻度(回)	表現形式の種類(回)
4~	あー(4)
1~3 (計18)	んー(3)・おー(2)・あのー(1)・うー(1)・うーん(1)・だけど(1)・なんだか(1)・まあ(1)・もう(1)・やー(1)・やっぱり(1)

表6　日本語母語話者のDMの表現形式(磯野2013)

出現頻度(回)	表現形式の種類(回)
104~35	あー(104)・なんか(53)・えっと／で(40)・うーん(35)
34~17	まあ(34)・あの(33)・えー(26)・あのー(17)
16~12	えーと(16)・あと(15)・いや(14)・えーと／でも(12)
11~8	いやあ(11)・えっとー／だから(9)・ちょっと／やっぱ(8)
7~6	あとは／あんまり／えー／なんだろう(7)・えと／もう(6)

8) 英語での oh, well, and, but, or, so, because, now, then, I mean, you know, に相当する談話の連結やコンテクストの調整に重要な働きをもっていると考えられる要素で、「指示・言及」「あいづち」「返答」を含まない「接続」「つなぎ言葉」「フィラー」を指す。詳しくは磯野(2010a)を参考のこと。

5~4	ま／んー(5)・こう／その(4)
3	いやー・そのー・それで・じゃあ・っていう・と・でー・どうなんだろ・なんていうんですかねー・やっぱり
1 (計624)	あーあー・あとー・う・えとー・かー・じゃ・それって・それと・ただ・だーから・ついでに・っと・ていうか・ていう風に・てって・とりあえず・とりあえずなんか・どうでしょう・どうですかね・どうなんでしょう・どうなんでしょうね・どうなんですかね・なので・なん・なんかちょっと・なんだろなんでも・なんでしょう・なんだっけ・なんて・なんていうか・なんですけど・に・のでー・まー・もうちょっと・やはり・んで

表5と表6の比較から、TNのほうがDMのバリエーションが少ないことが確認された。戦後、TNの日本語は化石化したため、語彙や文法知識のみでなく、あいづちやDMのバリエーションも少ないままでとどまったものと考えられる。つまり、TNは日本語母語話者より少ない種類のあいづちやDMをうまく使用することで、ターン交替の流れをとめないようにしていると考えられる。TNの日本語学習歴や当時の日本語話者との交流を考えると、このようなストラテジーは公学校での教室学習で習得したとは考えにくく、日本語母語話者と特に交流があった戦時中の短い期間に身に付けた可能性が挙げられる。

6. まとめと今後の課題

以上、日本語能力の高くないパラオ人日本語話者TNの「会話の展開」について、ターン交替時の発話に注目して日本語母語話者や日本語学習者との比較を行った。

その結果、TNは「いきなり会話を始めたり、言いたいことを話したりする」あるいは「命題的意味のみを話す」ような直接的な発話を避け、かつ「急に黙り込まず」に様々な形式(的分類の項目)を使用してターン交替し、会話を展開していることが分かった。このようなストラテジーはTNが教室学習で習得したものとは考えにくく、つまりそれは教室外でもこのようなストラテジーが習得可能なことを示唆しており、日本語教育においても学習者に気づきを促すヒントとなり得る。言い換えれば、日本語教育の中で教師がこのような知識を有し、その上で学習者に周囲を観察するよう日頃から意識させることで、学習者がターン交替や会話の展開に関わるストラテジーを日常生活の中で習得するきっかけとすることは、初習レベルからでも可能ではないかということである。

今後は、自分の用いようとする語句が適切であるかどうかを確認するために語彙を示して適切な語句を問う「適語探索」など、形式(的分類)およびその機能の妥当性の検証、一発話の文中に見られた形式(的分類)を含めた会話ストラテジーの分析などについて質的な分析を進めていきたい。

【参考文献】

磯野英治(2009)「日本語母語話者のターン交替における定量的分析とその語用論的特徴について―会話教育への示唆―」『2009年度韓国日本学会傘下学会連合学術大会　Proceedings』、韓国　日本学会、

pp.122-126
_____(2010a)「日本語母語話者の会話におけるターン交替の特徴について―インタビュー会話における定量的分析から―」『日本研究』Vol.28、中央大学校日本研究所、pp.137-158
_____(2010b)「日本語母語話者のターン交替における語用論的特徴について―機能的分類による定量的分析と会話教育への示唆―」『日本学報』第84集、韓国日本学会、pp.227-240
_____(2011a)「日本語の会話におけるあいづち・ディスコースマーカーの語用論的特徴と会話教育への示唆」『중앙대학교 국제학술심포지엄 한·중·일 3국의 이문화커뮤니케이션에 관한 보편성과 특수성(Chung-Ang University International Symposium: The Universal and Distinctive Traits in Cross-Cultural Communicative Patterns of Three East Asian Countries; Korea, China and Japan)』、韓国中央大学校、pp.23-33
_____(2011b)「日本語母語話者の会話における表現形式とその語用論的特徴について―ターン交替時の発話に着目した定量的分析―」『2011年度韓国日本学会傘下学会連合学術大会Proceedings』、韓国日本学会、pp.81-86
_____(2011c)「ターン交替時の発話に着目して話し言葉の機能・効果に迫る―日本語母語話者間の会話における定性的分析―」『The Third International Seminar on Japanese Linguistics and Japanese Language Education』、インドネシア教育大学、pp.1-13
_____(2013)「日本語会話における表現形式と機能の多様性について―ターン交替時の発話に着目した定量的分析―」『日本学報』第94集、韓国日本学会、pp.67-78
磯野英治・上仲淳(2014)「日本語学習者の接触場面におけるターン交替時の発話の語用論的特徴」『大阪大学国際教育交流センター論集 多文化社会と留学生交流』第18号、大阪大学国際教育交流センター、pp.31-39
宇佐美まゆみ(2007)「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)2007年3月31日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度 科学研究費補助金 基盤研究B(2)(研究代表者 宇佐美まゆみ)研究成果報告書、pp.17-36
大浜るい子(1998)「日本人の言語行動―談話展開のためのストラテジー―」『広島大学日本語教育学科紀要』no.8、pp.97-105
斎藤敬太(2014a)「パラオ人の日本語話者に見られる『埋め合わせ方略』―パラオ・伊賀上野・大泉を比較して―」、公開研究会 旧南洋庁地域パラオの日本語からアジア・太平洋の日本語教育を考える、口頭発表資料、University of Technology, Sydney
_____(2014b)「パラオの残存日本語話者のコミュニケーション・ストラテジー」シドニー日本語教育国際研究大会2014、ポスター発表、University of Technology, Sydney
ザトラウスキー,ポリー(1993)『日本語の談話の構造分析―勧誘のストラテジーの考察―』、くろしお出版
真田信治(1996)「チューク語(ミクロネシア)における日本語からの借用語」『言語学林 1995-1996』、三省堂、pp.45-53
西原鈴子(1991)「会話のturn takingにおける日常的推論」『日本語学』10-10、明治書院、pp.10-18
初鹿野阿れ(1998)「発話ターン交代のテクニック―相手の発話中に自発的にターンを求める場合―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』24、東京外国語大学留学生日本語教育センター、pp.147-162

畠弘巳(1988)「外国人のための日本語会話ストラテジーとその教育」『日本語学』7-3、明治書院、pp.100-117

_____(1992)「会話のストラテジー」『ケーススタディ　日本語教育』、岡崎敏雄、川口義一、才田いずみ、畠弘巳編　おうふう、p.117

堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』、くろしお出版

由井紀久子(1996)「旧ヤップ公学校卒業生の日本語談話能力―訂正過程についての一考察―」『阪大日本語研究』8、大阪大学文学部日本語学講座、pp.73-85

ロング,ダニエル・新井正人(2012)『マリアナ諸島に残存する日本語―その中間言語的特徴―』、明治書院

ロング,ダニエル・今村圭介(2013)「パラオで話されている日本語の実態―戦前日本語教育経験者と若年層日本滞在経験者の比較―」『人文学報』473、首都大学東京人文科学研究科、pp.1-30

ロング,ダニエル・斎藤敬太・Masaharu Tmodrang(2015)「パラオ語で使われている日本語起源借用語」『人文学報』503　首都大学東京人文科学研究科、pp.79-102

Bakeman, R. & Gottman, J. M. (1986)Observing interaction: an introduction tosequential analysis. Cambridge University Press.

付記

本研究は、平成24－25年度科学研究費補助金基盤研究(C)「ネイティブ不在地域で発生した新型接触言語－『アンガウル島日本語』の調査研究－」(研究代表者 ダニエル・ロング)の助成のもとで行われた。

〈 요 지 〉

팔라우인 일본어의 담화적 특징
-턴 교체시의 발화를 중심으로-

본 연구의 목적은 일본어 레벨의 그다지 높지 않은 팔라우인 일본어 학습자 TN씨의 회화를 분석하여, 일본어 모어 화자 및 일본어 학습자와 비교하여 그 특징을 밝히는 것이다.

조사 결과 TN씨는 일본어 모어 화자나 일본어 학습자와 마찬가지로 맞장구나 담화표시(Discourse Marker)를 활용하여 턴 교체(Turn-taking)함으로써 원활한 커뮤니케이션을 도모하는 것으로 나타났다. 이것은 TN가 어휘나 문법 지식의 부족을 이들 요소로 보완함으로써 회화를 원활하게 전개한다는 것을 의미하는 것으로, 바꾸어말하면 회화가 쉬이 끊어지지 않도록 주의를 기하고 있다는 것을 의미한다. 이러한 이유에서 회화의 원활한 전개를 위해서는 이러한 전략이 중요하다는 결과가 도출되었다고 할 수 있다. 또한 본 연구에서는 맞장구나 담화표시(Discourse Marker)의 단독 사용에 의한 짧은 턴 교체(Turn-taking)와 일본어 모어 화자에서는 볼 수 없는 맞장구인 "오-", 상대방의 발화를 반복함으로써 회화가 계속되도록 하는 기능 등의 사용이TN씨의 회화에서 관찰되었다.

고령화에 따라 잔존 일본어 화자가 감소하고 있는 현재의 상황 속에서 지금까지 연구의 대상이되지 않았던 일본어 레벨의 그다지 높지 않은 화자에 대해서는 데이터 자체가 적고, 향후 데이터 수집이 더욱 더 어려울 수 있다는 것은 쉽게 상상된다. 그 점에서 본 연구는 자료적 가치로도 귀중하다. 또한 본 연구에서 얻은 지견은 회화를 원활하게 전개하는 전략이 일본어 초급 수준부터도 습득가능함을 시사하고 있다고 할 수 있겠다.

논문분야 : 사회 언어학
키워드 : 팔라우인 일본어 화자, 턴 교체, 양적·질적분석, 일본어 모어 화자·학습자와의 비교

▣ 사이토 케이타(斎藤敬太)
首都大学東京大学院 人文科学研究科 人間科学専攻 日本語教育学教室 博士後期課程
saito-keita@ed.tmu.ac.jp

▣ 이소노 히데하루(磯野英治)
名古屋商科大学 経済学部 経済学科 専任講師
hisono@nucba.ac.jp

■ 投 稿 日 : 2016년 3월 31일
■ 審査開始 : 2016년 4월 24일
■ 審査完了 : 2016년 5월 22일
■ 掲載確定 : 2016년 5월 28일